

# 白選五十一首



## 米川千嘉子

よねかわ・ちかこ 1959年、千葉県野田市生まれ。早稲田大学第一文学部日本文学科卒。79年、「かりん」入会、馬場あき子に師事。現在、編集委員。歌書に『和歌のよみかた』（共著）、『四季のこぼれ100話』。角川短歌賞、現代歌人協会賞など受賞。今年、第5歌集をまとめる予定。

いかなる思慕も愛と呼びたることなくてわれの日記は克明なりき

春の鶴の首打ちかはす鈍き音ころ死ねよとひたすらに聴く

白藤のせつなきまでに重き房かかる力に人恋へといふ

〈女は大地〉かかる矜持のつまらなき昼さくら湯はさやさやと澄み

やはらかく二十代批判されながら目には見ゆあやめをひたのぼる水

桃の蜜手のひらの見えぬ傷に沁む若き日はいついかに終らむ

白き兔春風にかたまり売られぬる街ゆきて婚のこともしづけし

みづからを活かしたる生あるいはまた殺しし生を女のみ言ふ

氷河期より四国一花は残るといふほのかなり君がふるさとの白

否いなといふころに食めりみづみづと平原のやうな大真桑瓜

黄菊の香つよき酢をもて消してゆく十たび百たび否定をすべく

『夏空の權』

年末、初めてパリに行った。与謝野晶子や岡本かの子の住んでいたところを訪ね、たかさんの絵を見、ボードレールとサルトルとポーアールのお墓にいろいろと願いごと(?)をしてきた。かつて、一年アメリカに住んでいて、これが西洋と想っていたところもあるので、それがずいぶん覆されて面白かった。

たしか高橋和巳のエッセイだったであろうか。人が亡くなっても、その人の考えたことや氣配の痕跡こゑずゐだけは残って、そのおびただしい集積の上に現在が作られるというようなことを讀んだ記憶がある。

パリは、「氣配の痕跡」どころではない。百年、二百年前の建物や道路の上に、現在の日常がある。もちろん、それが木造ではなく、

氣多の秋蜻蛉は太き銀青の胴もてしんしんとつがひ流れぬ  
子は天与の者にてあるか秋の陽は贖金のごと黄菊を照らす

「二夏」

胎のうちの小さき小さき足は間ふ母汝れいかに生きて働く  
みどり子の甘き肉借りて笑む者は夜の淵にわれの来歴を問ふ  
桜村にさくらは老いて巨大なる白犀のごと花わらひたり

苦しむ国のしづかにふかき眉としてアイリッシュアメリカンゲイの列ゆく

白鳥の魂ありし莢みづからの白のふかさに朴わらふかも

幼な子にはじめての虹見せやればニギといふその美しきにふるへ

湯のやうな風ある道に逢ひし蝶はわれらに母子の刻印を押す

ああ母でなくともよしと樹は立ちて天に吊らるる濃緑の鉢

何者か夫を杭打つと思ふまでぐんぐん眠り沈みゆくあはれ

ひかりとは飛び交ふ時間秋の星見れば青年の吾子も流るる

かすかなる紫ひかり縞馬の縞ひとしづく冬土に垂る

六月は断崖となる梢よりはげしく落ちぬそらいろの卵

ゆふぐれのさびしい儀式子を拭けばうす桃色の足裏あらはる

「髪切るは影を切ること」影を頭上に絢爛と巻きし葛原妙子

合歓よ合歓いく度眠らば夢に見む澄み果つるまで滅びし百済

まつ白きさくらよさくら女子も卵もむかし贈り物なり

木のなかの水ひらく速度うつくしく弟は若葉兄の木は青葉

たましひに着る服なくて醒めぎはに父は怯えぬ梅雨寒のいへ

「たましひに着る服なくて」

石造りの美しい近代都市としてあらかじめ計画されたものであり、観光的価値においてもはかりしれないものであるということはいうまでもないが、そういう現実性だけではない確信がパリには満ちていた。

かつての王宮だったルーブル美術館の壮麗さは、むしろ人間の存在のやりきれない暗さを思わせるもので、肖像画をいつそう重苦しく見せている。大きな駅として建てられたオルセー美術館は、高い天井から入る日の光にかつてそこで限りなくくりかえされた出会いと別れのざわめきを容易に想像させたし、モネの美術館といわれるマルモタン美術館も、個人の邸宅だったもので、芝生をよぎる黒猫を窓から見ながら、その美しい風景にふと倦んだかもしれない収集家の視線を感じた。

一枚の絵は一枚の絵として完結せず、そういう過去の時間や人々の気配の上になまなましく揺らいでいる。

短歌の言葉も、本来そうした過去の時間をもたらす揺らぎとともにあったのではないか。その様式は、たとえば桜を見たら、それを数百年あるいは千年むかしに見た人の視線を、感じるこのでける堅ろうな「建物」であるはずなのだ。過去の時間や人々の気配から送られる鋭い視線によって、「現在」は定着されるだろう。

時間をチコに返してやらうといふやうに父は死にたり時間返りぬ

子のめぐりみづみづしくて落ち着かず藁屑のやうな蟻螂も生る

春の雲 口頭頂くちうていにあらはれて一斗米食みし女房のこと

暗黒のつね途中なる雁行図ある雁ははや闇に溶けたり

大袂びやくぐちきりきりりと方形の白光を落とす庭師来てをり

ユーラシアより来しものしづけさに鯉おぼづつはをりたり大砲のごと

子にはまだ白い時間があるばかり あさがほ、ひるがほ、よるがほ、あさがほ

あふあふと冷ますは不思議な食しものの葛湯のなかの死者の荒魂あらいたま

羅紗夫人らしや・フェルト夫人・絹夫人 板に巻かれてひんやりとをり

「疲れたらすわつていいです」子の描かきし椅子の絵に今夜月光すわる

今朝髪にとまる光がすこし濃く鍵穴あいたやうに梅咲く

差し歯が眠り臓器が眠りわがうちのたくさんの人と眠るかなしさ

手を隠す乙女らのなか一葉はああ、と言ひ憂鬱の手を撮られたり

井戸の辺へにをみな働はたらき井戸のやうな深き空間と身を嘆かずや

春雪のなかの羽毛を拾ひくるこの子を生なみしさびしさ無限

玉碎の写真の「崖を飛ぶ女」かすれゐて永ながし死に移る生

空港行きの白き電車に子とゐればもう一つ影を産みたくなりぬ

ナイーブであることきらきら美うつくしき世は過ぎてだれもナイーブに甘ゆ

「銃後といふ不思議な町\*」を産んできたをんなのやうで帽子を被る

\*「銃後といふ不思議な町を丘で見た」(渡邊白泉)

「二葉の井戸」